



犬の王様 (6)

大臣と家来共は馬を降りて洞穴の中へ入って行きますと、やがて一つの見事な宮殿に来ました。その宮殿のお庭に一人の気高い姿をした女と一人の美しい青年が話をしておりました。

大臣は近寄って丁寧にお辞儀をしながら、
「今ここへ一匹の犬が猫を追っかけて来はしませんでしたか」



犬の王様 (7)

と尋ねました。

「猫は来ませんが、犬ならばそこ
に来ております」

と気高い女は^{わかもの}青年を指しました。

「エッこの方が」

と大臣は気絶する位驚きました。

女は顔を真赤にしながらかう申
しました。

「今こそ本当の事を申し上げます。

私はこの山の森の精で御座います。





犬の王様 (8)

ずっと前にこの国の王様が狩りにお出でになった時にこの洞穴へ御入りになって、私と夫婦のお約束をなさいました。その後この皇子がお生まれになりましたが、私は一歩もこの洞穴を出ることが出来ませんので、仕方なしに皇子を一匹の犬にして王様のお傍へ差し上げました。お母さんなしでは誰も本当の皇子と思わないからで御座



犬の王様 (9)

います。今日、皇子は王様がお亡くなりになってから暫く私に会いませんので、会いたくてたまらず、猫を追っかけるふりをしてここまで来られたのだそうで御座います。もう仕方が御座いません。なにとぞ王宮へ皇子をこのままの姿でお連れ下さいまし」

皆は、王子の顔が王様とこの森の精の女によく似ているのに気が



犬の王様 (10)

ついで、皆ひれ伏してお辞儀をしました。そうして王宮にお伴をして、今一度この若い美しい王様のためにお祝いをしました。

若い王様はその後、暇さえあれば森に行ってお母様に会うのを何より楽しみにしておりました。

おわり

